

教養科目アカデミックスキル1における 学生の自己評価と授業実践

蛸名正司

1. はじめに

本報告では、2018年度に実施されたアカデミックスキル1の授業実践について、①学生の自己評価をもとに授業の効果を検討し、②実施された授業のうち2つの実践を取り上げ、学生の自己評価との関連を検討することを目的とする。さらに、それらの検討を踏まえて次年度以降のアカデミックスキル1の在り方を議論したい。

2. 自己評価アンケート

(1) 目的

一般に、授業者が授業改善の際に手がかりとする情報は、授業中の学習者の様子や試験の結果（レポート課題含む）などである。授業者はそれらのフィードバックをもとに、実践内容を振り返り、次回以降の授業を改善する手立てを考案する。その際、学習者の認識を幅広く把握することがより効果的な授業を立案することにつながるといえる。そこで今回のアカデミックスキル1の授業では、学習者（以下、学生）による自己評価を実施することとした。本節では、アカデミックスキル1を受講した学生が、「身についたこと」「身につかなかったこと」「わかったこと」「わからなかったこと」「何に活かせるか」について自己評価した結果を報告する。

①身についたこと、わかったことについて、何に活かせるか

アカデミックスキル1の最終期末レポートでは、学生が3つの授業目標¹に到達したかどうかを把握できる一方で、学生自身が何を身につけたと感じているか、あるいは何をわかったと感じているかなどの、自己理解の側面までとはいえない。特に授業実践において問題となりうるのは、学生の自己理解と実際のパフォーマンスとが乖離している場合である。アカデミックスキル1の内容に即していえば、「主張—根拠がわかった」と自分では自覚していたとしても、実際に提出されたレポートが「主張—根拠」に基づいた記述になっていないという場合である。この場合、「主張—根拠がわかった」という自己理解がそもそも誤りではあるが、その不十分な理解が修正されないために適切な学習が促されず、結果としてレポート課題を作成する段階に至るまで正しい知識が獲得されなかったといえよう。そのため、自己理解と実際のパフォーマンスとに乖離が見られる場合は、自分の理解状況を把握するためのメタ認知的活動などを授業の中に積極的に取り入れたりする必要があるであろう（三宮，2008）。その意味で学生の自己理解を把握し、それが授業内容や実際のパフォーマンスと一致しているかを検討することは重要といえる。そこで、アカデミックスキル1の授業を受けて、「身についたこと」「わかったこと」などに関する自己評価を回答してもらいその内容を検討する。

②身につかなかったこと、わからなかったこと

最終期末レポートを評価することで個々の学生が、何を身につけることができなかったのか、あるいは

¹ 1. しっかりと論証を行った文章を書く—論理的に考える。2. パラグラフ・ライティングに従った文章を書く—論理的に書く。3. 剽窃を避け、適切な引用を行う—論理的に書く。

何がわからなかったのかを、ある程度把握することは可能である。しかし、レポート課題からは個々の学生がどのような内容に困難さを抱いたり、戸惑いを覚えたりしたのかを詳細に読み取ることは難しいといえよう。そこで授業改善のためにより直接的な情報を得ることを目的として、「身につかなかったこと」及び「わからなかったこと」を自己評価アンケートによって具体的に記述してもらうこととした。

以上から、次年度以降のアカデミックスキル1の在り方を検討するための情報を多面的に得るために、アカデミックスキル1の受講者を対象として、自己評価アンケートを実施した。

(2) 方法

対象者 アカデミックスキル1の受講者（8クラス中7クラス）を対象とした。アンケートの回答者の合計は187名であった。

手続き 授業の最終日に、以下の項目について自由記述で回答してもらった。

- ・【スキル面】この授業で身についたことは何ですか？
- ・【スキル面】この授業で身につけることができなかった点は何ですか？
- ・【知識・理解面】この授業でわかったことは何ですか？
- ・【知識・理解面】この授業でわからなかったことは何ですか？
- ・【活用面】この授業で学んだことは、今後どのようなところで活かしたい（活かせる）と思いますか。
- ・【その他】この授業で学んで良かったことは何ですか？

本報告では、「スキル面」「知識・理解面」「活用面」について報告する。

(3) 結果と考察

「身についたこと」、「わかったこと」、「活用」については、各クラスに共通する内容が多かったため、カテゴリごとの人数の割合を求めた（図1～3）。なお、1人の回答者が2つ以上のカテゴリに言及していた場合、それぞれのカテゴリの回答としてカウントした。したがって、回答数は対象者数を上回る場合があり得る。

「身につかなかったこと」、「わからなかったこと」については、学生から多様なコメントが出されたこと、また、各学生の個々の回答が授業改善にとって有益な情報となり得ることから、全記述を掲載した（表1・2）。

①身についたこと、わかったこと、活用

【スキル面】「この授業で身についたことは何ですか？」

「身についたこと」の上位3カテゴリは、「論理的文章・文章力」「パラグラフライティング・文章構成・ハンバーガー構造」「論理的思考・論証の仕方・演繹帰納」に関する内容であった（図1）。これら3つのカテゴリはいずれも、本授業の学習目標である「1. しっかりと論証を行った文書を書く。」

「2. パラグラフライティングに従った文章を書く。」に合致したものであり、一定数の学生が身についたと実感していたことが示唆された。

【知識・理解面】「この授業でわかったことは何ですか？」

「わかったこと」の上位3カテゴリは、「パラグラフライティング・文章の構成」「論理的文章の書き方・論文の書き方・説得力のある文の書き方」「論理的文章・論理・ワラント」であった（図2）。これらは「身についたこと」とほぼ同様であり、論証やパラグラフライティングがどのようなものかについて一定数の学生は理解したと自覚したことが示唆された。

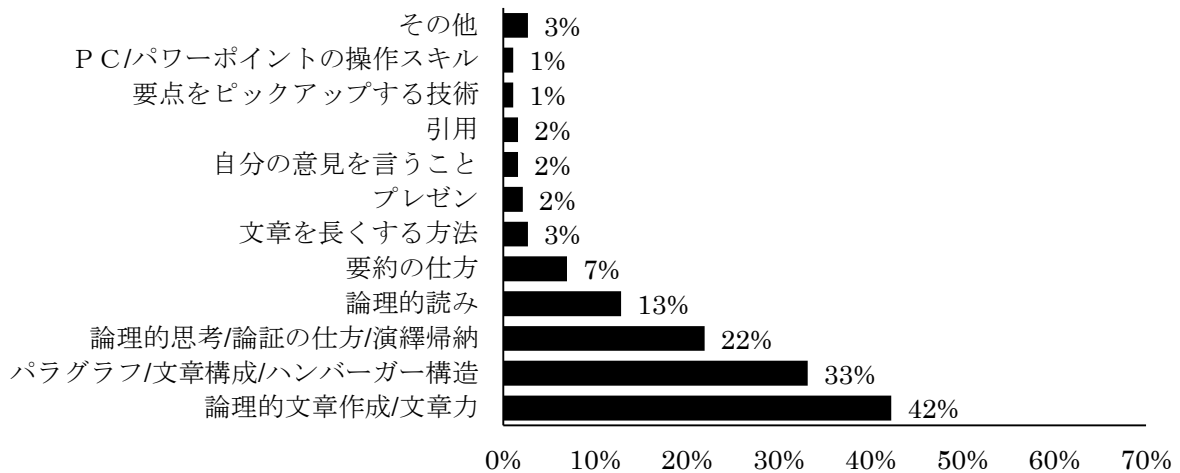


図1 「身についたこと」の 카테고리ごとの集計結果

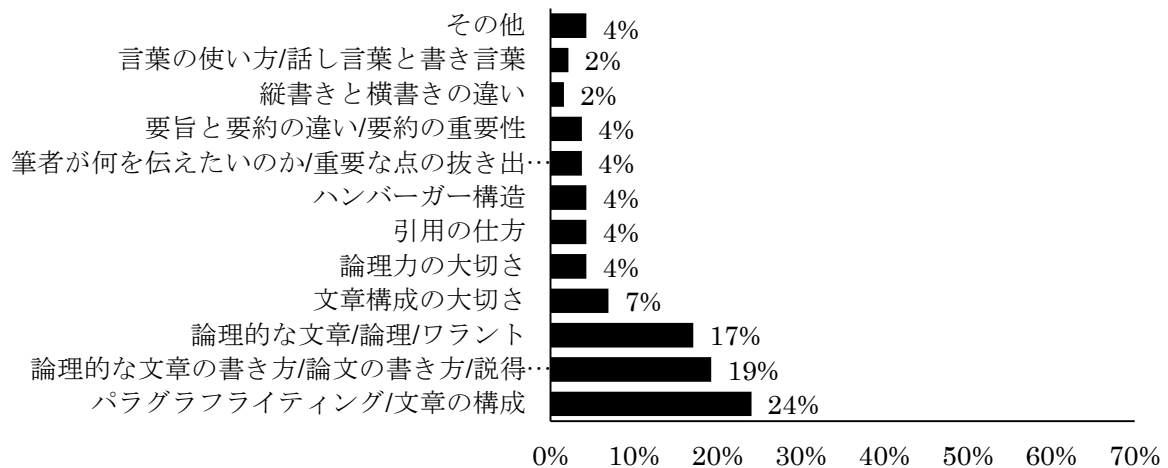


図2 「わかったこと」の 카테고리ごとの集計結果

ここで注目したいのは、「わかったこと」の上位3カテゴリーの割合はいずれも「身についたこと」の上位3カテゴリーよりも1割～2割程度低いことである。この点は「身についたこと」を手続き的知識、「わかったこと」を概念的知識と置き換えると、次のように解釈できるであろう。授業を通して、論理的な文章やパラグラフライティングに基づいた文章を、ある程度「書けるようになった」といえるが、深い水準での論理関係の理解や、パラフライティングの有用性の理解などまでは十分に達成されなかった可能性が考えられる。一般に、手続き的側面だけが身についた知識は、忘却が早いことが知られている。知識の定着を促す上で、いかに概念的な理解を促進できるかが、今後の課題といえる。

ところで、「わかったこと」として、「文章構成の大切さ」あるいは「論理力の大切さ」などを指摘する学生が一定数見られた。学習した内容の重要性を自覚できることは、今後の学習への活用にも結びつくことから、このような記述がみられたことは、今回の授業の成果の一つといえる。しかし、そのようなことを指摘した学生はごく一部であることから、学習内容の重要性をより実感できるような授業にする必要があると考えられる。

【活用面】「この授業で学んだことは、今後どのようなところで活かしたい（活かせる）と思いますか？」

「どのように活用したいか」についての回答では、「卒業論文・論文作成」「レポート・文書作成」を挙げた学生が大半を占めた(図3)。このことは、本授業で扱ったような論証やパラグラフライティングに基づいた文章作成の場として、多くの学生が卒業論文やレポート課題への活用を意識していることを示している。また、「日常生活・社会」という内容を挙げた学生も2割弱存在した。アカデミックスキル1が教養科目として位置づけられていることを踏まえると、大学内の課題に役立てようとするだけでなく、大学外や卒業後の活動にも活用することを意識していることは望ましいことであり、本授業の重要な成果といえる。

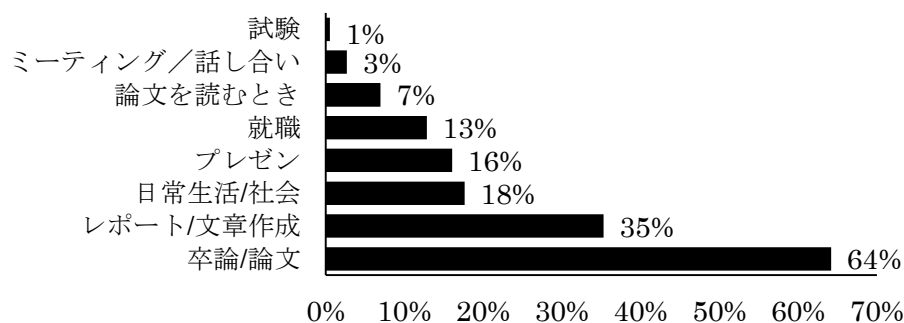


図3 「どのように活用したいか」の 카테고리ごとの集計結果

②身につかなかったこと、わからなかったこと

【スキル面】「この授業で身につけることができなかった点は何ですか？」

「身につかなかったこと」の回答内容を表1に示す。以下では、今後の授業実践のために、一考に値すると思われる回答をいくつか取り上げて検討する。

「1. 論証の早さ」「2. 考えを素早くまとめて書くこと」、「11. 文章を早く書く力」「47. 時間を効率よく使ってレポートを処理すること 時間が掛かりすぎた」などは、より短時間で効率的に文章を作成したいという意欲を示すものであろう。また、「10. うまい言葉の言い回し」「44. もっと隙がない論文作り」「45. うまい書き出しの書き方」などはより質の高い文章表現を身につけたいという意思の表れと考えられる。これらのコメントは、論理的な文章表現はある程度できるようになった上で、さらなる向上を目指す学生の意志の表れとして受け止めることができる。その意味で、「身につかなかったこと」として記述されているが、実際には授業実践にとっては極めてポジティブな側面を含んでいるといえよう。一方で、授業目標と直接かかわる回答として、「36. 主張と根拠」「89. パラグラフをつなげる技術」などが身につかなかったと感じた学生も一定数いることが示唆された。教材や説明の仕方、あるいは授業形態を一層工夫する必要があるといえる。

表1 「身につけなかったこと」の学生の回答（原文ママ、便宜上の通し番号を付した）

1. 論証の早さ	40. 言い換え
2. 考えを素早くまとめて書くこと	41. 長い論文（3000字くらい）を書く能力
3. より発展的な文章の書き方	42. 節道をたてて発表すること
4. 帰結における論証の引用（帰結でうまく自分の意見をまとめる方法）	43. 演繹と帰納 帰納だった場合の細分化
5. 縦型の論の書き方	44. 発表力
6. 作文能力	45. 論理的な文章の作り方がまだ微妙
7. 正しい言葉	46. 直列か並列かすぐに見分けること
8. 感情的に抱えている物を言語化すること	47. 話者の主張・根拠を読みとる力
9. 要約	48. プレゼンの慣れ
10. うまい言葉の言い回し	49. パラグラフライティングの細かいルール
11. 文章を早く書く力	50. 文章を自分で書くときの構成力をもっとつけたかった
12. 論理的な文章表現	51. 言葉、語い力
13. 問題の読解力	52. 帰納、演えきの完璧な考え方
14. 何回も文章を書いてきたが、文章力というのは上がっている実感がなかった	53. 少ない文章で、説得力を持たせる文章を書く能力
15. 文章の要約	54. フラントの発見及び作成
16. 話す力	55. 論理的に読むことがジャンルによってできるようになったものもあればできなかったものもある
17. 文章の内容を考える発想力	56. 要点をまとめること
18. 文献探し	57. 主張や根拠、フラントではない文を「本当に主張や根拠、フラントではない」と証明し、カットしても良い判断する能力
19. 反論	58. プレゼン力
20. 主張と根拠	59. 書く・考えるスピード（時間がかかる）
21. 相手を納得させる、上手な論文を書くテクニック	60. 隙の無い文章をうまく作ること
22. 筋の通った主張を考えること	61. 自分で文章を考えること
23. プレゼンテーション	62. 正しい日本語の使い方など
24. フック等、読み手を引くためのポイントとなる技術はまだまだなのかなと感じました	63. 自分の文章の記述の手順
25. 文を上手く構成する仕方	64. 完全な文章の要旨・要約
26. コンピュータの具体的なスキル…等	65. 他人とのコミュニケーション能力
27. 様々な題に対して、正確に論理的に書く技術	66. 伝わりやすい表現の扱い方
28. もっと隙がない論文作り（しばしばつまれそうな論証だった）	67. 小説のような文章の書き方
29. うまい書き出しの書き方	68. 段落を始めるときに使う、言葉のバリエーション
30. ユーモアがある文章	69. 論説文の書き方 論理の形態の応用
31. 時間を効率よく使ってレポートを処理すること 時間が掛かりすぎた	70. ディスカッション能力などです
32. プレゼン能力	71. 文の書き方はわかったが、実際に書くことにはまだ苦手意識がある
33. 論説文の根拠部分の見つけ方 要約がうまく作れなかったこと	72. 関連性が高い文章を引用し、説得力を高める技術
34. 授業内で、自分が書いた文章を添削されるというようなことがほとんどなかったので、論理的に書く力はあまり身につけていないように思う	73. グラフとか図を挿入した場合の文章の書き方
35. 長い文章を書く力	74. パラグラフをつなげる技術
36. 自分では、要約の力があまり向上しなかったと思います	75. パラグラフ間のつながりや接続詞の使い方がまだできていないと感じた
37. 実戦的に書くこと	76. 分かりやすく伝える書き方
38. 相手に説得力を与えるために、引用を用いず、自分の文章だけで書く方法	77. 自分で書いたレポートを他人の視点で見ても考える
39. 社説を読む習慣	78. 短い時間で論文を書く技術

79. 論理的に書く力に比べ、論理的に読む力はあまり身につけることができた実感がないです	100. 文章の内容を思いつくこと
80. 細かい部分	101. 読み手を納得させる理由を書けなかった もっと分かりやすく、十分な説明を入れる
81. 論理的文章の論証などを素早く理解する力	102. 前後の文のつながり→自分の主張したいこと、書きたい事がたくさん浮かび、それをうまく整理できなかったので、読みづらい文章になることが多かった
82. 文章をさらに説得力があるものにすること	103. 読みやすい文章を書くこと 文献を見つけることが難しかったし、見つけることのできないこともあった 授業のレポートで求められたことと合致する
83. 文章を呼んだ際に難しい文章だとどれが主張・根拠か見分けることが身につけられませんでした	104. 自分の意見を強く、明確に表現すること
84. 文章の書き方や表現方法	105. レポートを読む力
85. TSがずれないように書くことが難しい	106. 上手なフックの書き方 句読点や記号の適切な配置
86. 文学的な力(アカデミックスキルに必要なと言われればそこまでですが…)	107. 自分自身で小論文がどのくらい良くなっているか
87. 文の構造の組み立て方が、難しかった	108. (自分の文章) 読み返したうえで、間違いにすぐ気づけるようになること(誤字・脱字など) 明らかに不備な点が多い授業の早急な改善のさせ方
88. 語彙力	109. 完璧なパラグラフライティングのスキル
89. 引用の細かな方法	110. TSを長く書いてしまうこと
90. 実際に論証で文章を書くこと	111. ブラインドタッチ
91. 誰もが納得する論証を書くこと	112. イントロダクションとコンクルージョンを書くこと 卒論のような長い文章を書くスキル
92. 長文を読む場合の主張・根拠・ワラントの探し方(短文・中文は授業でやったが長い文は授業でやっていないので、長い文を読んだ時に、どれが主張かわからない時がある)	113. 深い内容のアカデミックスキル(応用)
93. ルールに合った文章を書くこと	114. 意味が分かりやすい上手な文章をかくこと
94. 1000字以上の長い文章をハンバーガー構造で書く力を身につけることができなかった	115. プレゼンテーションの実践, 経験
95. 段落同士をスムーズに繋げるスキル	116. 大勢の人の前で話す能力
96. ワラントや4つのSSの見分けが上手くできない	117. 間違った文章表現の見つけ方
97. 自分の書いてきたレポートに自信が持てなかったこと 論文で書いてはいけない話し言葉であったり、基礎的な部分が抜けてしまっていた	118. プレゼンテーション等, 人に伝えること
98. この授業に期待していたことはおおむね身に付いた	119. 実戦での使い方がかた
99. 安定して長い文章を書くこと これから会津大学で生きぬいていく自信←先輩とのコネがほとんどないので、うまくカベをこえられるか不安です	120. コアメッセージを見つける力
	121. 論理的な説明のし方 パラグラフとパラグラフのつなげかた

【知識・理解面】「この授業でわからなかったことは何ですか？」

「わからなかったこと」の回答内容を表2に示す。「17. どこまでこまかくワラントをはさむべきか、隙のない論文を作る際の注意点」「34. 文章を作る時、いつ定義をはっきりさせるかのタイミング」などは、文章を作成する際に、初心者・熟達者を問わず迷う内容といえる。このような「わからなさ」は、むしろ文章を作成するとはどういうことなのかを理解し始めている証拠であるともいえるため、この授業での学習成果の表れの一つとして解釈することができよう。一方で、授業目標に直接関連する内容として、「22. 論理的に書くこと」、「23. 根拠の根拠って何でしたっけ?」、「24. 演繹と帰納」などが挙げられた。これらの内容は、授業で直接取り上げられた内容であるものの、十分に理解できなかったとする学生も一定数見られた。より概念的な理解を深めるような授業が求められる。

また、「42. 僕は友達によく何がいいのかわからない、日本語がおかしいと言われていました。自分

でも日本語がおかしいと自覚しています。周りが書いてきたレポートを見ても、その文がよりよくなるためにアドバイスすることが、本当に、そのアドバイスでよりよくなるのか分からなかった。」「47. 自分の文章の良いところ、悪いところなどが自分ではわからなかった」「63. ハンバーガー構造について知識がある人に自分が書いた文章を見てもらう機会が期末しかないので本当に書けるようになってきているのかわからない」などは、学生が記述した文章の添削を、教員が授業でどのように扱えばよいかについて、再考を促すコメントといえる。今年度の授業では複数のクラスで、学生同士が相互に文章の添削を行う作業を取り入れていた。文章の作成スキルを向上させるには、添削指導は不可欠である一方、クラスあたりの学生数や教員側の時間的制約などから、授業では学生同士の添削に頼らざるを得ない現状がある。今後の授業の改善に向けて、授業内で添削作業をどのように取り入れるか、検討する必要がある。

表2 「わからなかったこと」の学生の回答（原文ママ、便宜上の通し番号を付した）

1. 誰が論証の仕方を考えたのか	30. ジャンルによって主張と根拠をみつけることが難しかった
2. 具体的な「論拠」の説明	31. 文章の要点をつかむこと
3. 横型と縦型の違いがよくわかんなかった	32. 主張とあまり関係ない文章をカットしてもいいのか否か
4. 自分の意見を理論として昇華させること	33. 主張と根拠のような文と文の関係の、より細かいもの
5. 筆者の考えを読み取ること	34. エッセイなどの文章の読みとり
6. 自分の答案の出来ばえ	35. 論証に関わる文章以外の文章の書き方など
7. 細かい論文のパラグラフ内の役目など	36. 文章中にどのような論理が成り立っているかが分からなかった
8. 必要十分条件	37. 自分の文章の良いところ、悪いところなどが自分ではわからなかった
9. ディベートがなにかわからなかった	38. もう少し論理的に書くための言葉選びについては分からなかったです
10. ワラントが難しい	39. 長い文章を書く方法がわからなかった
11. どこまでこまかくワラントをはさむべきか、隙のない論文を作る際の注意点	40. 切り取って良い文の微妙な区別
12. イントロダクションとコンクルージョン	41. 文章を書くさい、出だしをどうすればいいか苦手だったのがそのままだったこと
13. ユーモアある文章を書きたかった	42. 論証に対する反論のしかた
14. 論証の例外	43. 英語で卒論を書くので、英語でのパターンを知りたかった
15. 英語でのレポート作成の仕方 日本語の場合と同じかどうか	44. 要約でいらぬ部分をどのような基準で見極めるか
16. 論理的に書くこと	45. 頭に浮かんでいるふわっとしたイメージや疑問を言語化する方法
17. 根拠の根拠って何でしたっけ？	46. TS-SS-SSS と主張-根拠=根拠の根拠（ワラントではない）の違いが分からなかった
18. 演繹と帰納	47. ワラントがどこまで必要か
19. 論理的文章の書き方	48. コアや主張を考える上での工夫など
20. 細い名前	49. 論文を読んでどの段落がどの段落にどのように関係しているかを見極めること
21. 文章を書く上でのテクニック	50. フック&ワライトなど
22. 後、自分は何をするべきか	51. 知識より、演習を主としていたので、もっと論文作成における基礎知識であったり、応用の知識を身につけたかった
23. 要約	52. 文章を簡単にまとめる方法
24. 主張・根拠が先生と一致しない	
25. 文章を読んだ際の根拠と、ワラントの判断	
26. しっかりと文章を作ることが「AS1の自己評価」についてのみだったため、引用や根拠づけなどがしっかりできてくるかどうか自分で判断しにくい	
27. 適切な引用のしかた	
28. 文章を作る時、いつ定義をはっきりさせるかのタイミング	
29. Thesis Statement やイントロダクション、コンクルージョンの仕組みについて理解できなかった	

53. レポートと論文の違い	62. ハンバーガー構造について知識がある人に自分が書いた文章を見てもらう機会が期末しかないので本当に書けるようになっていないのかわからない
54. 文章の読み方	63. 並列接続, 直列接続の違い
55. レポートの中身の作り方	64. 文章を相手に読みたいと思わせるような書き方
56. 文章全体の構成がまだ完全に理解できていない	65. 論文の中でなるべく使わない方がいい単語や文章(「～も」「～が,」)の見分け方, 定義
57. 正しい日本語の使い方	66. Thesis Statement は結局の所, どのぐらいの文の硬さであるか
58. フックと Thesis Statement のスムーズなつなげ方	67. 論証の(主張→根拠 ←ワラント)が複雑になると, わからなくなったりします
59. 僕は友達によく何がいいたいのか分からない, 日本語がおかしいと言われていました。自分でも日本語がおかしいと自覚しています。周りが書いてきたレポートを見ても, その文がよりよくなるためにアドバイスすることが, 本当に, そのアドバイスでよりよくなるのか分からなかった。	68. パラグラフライティングをした上で日本語として自然に, 上手に使う方法
60. 文章の論理構造など, どこにどの文章が係っているか, とても難しかった	69. 書いた文章のどこが悪いのか
61. 論文を書く際に使える表現	70. 短いTSの書き方
	71. レポートの読みとり方

3. 授業実践と学生の自己評価との関連

以下では, アカデミックスキル1の授業実践を2つ取り上げ(以下, A実践, B実践), 各実践が, 学生の自己評価にどのような影響を及ぼしているかを検討する(関連する実践として菊地(2019), 青木(2019)を参照)。両実践を取り上げた理由は, 次の2点である。

アカデミックスキル1では, 各クラスで共通テキストを使用している。今回取り上げる2つの実践は, その授業者がテキストの作成に関してこれまで中心的な役割を担ってきた。そのため授業の目標や展開などを十分に理解した授業者の実践を振り返ることは, 授業の改善を検討する上で有益であると思われる。また, 両実践とも, それぞれに特徴的な教材あるいは授業の方針を採用している。具体的には, A実践では, 「パラグラフライティングシート」が活用され, B実践では, 「長めの論証文作成」を目的とした授業が実践された。これらの実践は, いずれも共通の授業目標を念頭に置きつつも, 各実践者が独自に取り入れた内容である。本節では, 学生による自己評価のうち「身についたこと」「わかったこと」の結果を, A実践のクラス, B実践のクラスと7クラス全体との間で比較することで, 各実践が学生の自己評価にどのような影響を及ぼしたのかを検討する。

(1) A実践

A実践の結果が全体平均を大きく上回った項目は, 「身についたこと」(図4)では「論理的読み」であり, 「わかったこと」(図5)では「論理的な文章/論理/ワラント」であった。この結果は, A実践において, 授業の前半で「根拠→ワラント→主張」を扱った後, 「読解のステップ」において, 改めて論証の枠組みで文章をとらえさせたことの効果であると考えられる。論証について丁寧に扱ったことが, 論理についての深い理解を実感させることに有効であったといえよう。一方で, A実践の特徴の一つはパラグラフライティングシートの活用であったが, 他のクラスを凌駕するほどの高い自己評価に結びつくわけではなかった。パラグラフライティングシートを学生がどのように活用し, どのような使用感を抱いているのかなど, 今後検討する必要があるだろう。

(2) B実践

B実践の結果が全体平均を大きく上回った項目は, 「身についたこと」(図4)では「パラグラフライ

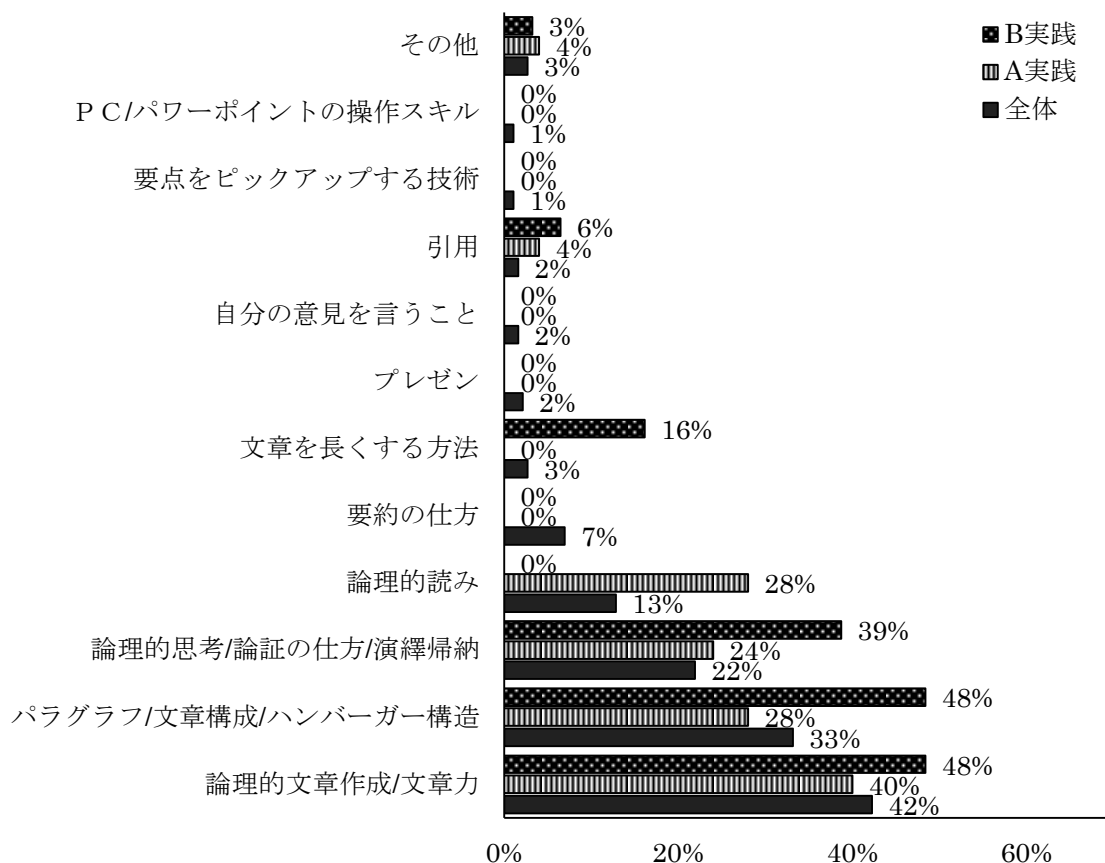


図4 「身についたこと」に関する「全体」・「A実践」・「B実践」の回答カテゴリーの出現率

ライティング/文章構成/ハンバーガー構造」,「論理的思考/論証の仕方/演繹帰納」,「文章を長くする方法」であり,「わかったこと」(図5)では,「パラグラフライティング/文章の構成」「文章構成の大切さ」であった。B実践の最大の特徴は,長い文章を作成することを目標の一つに取り入れていることである。実際に学生の自己評価にも「文章を長くする方法」が身についたことが記述されている(図4)。パラグラフライティングやハンバーガー構造といった文章構成に関する知識は,文章が長文化・複雑化するほどその有用性が増大すると考えられる。その意味でB実践における「長めの論証文を書けるようにする」という指導方針は,パラグラフライティングの学習に必然性を与えるという点で,重要な示唆を与えるといえよう。

4. 全体討論

本報告では,学生による自己評価に基づいて,アカデミックスキル1の実践を振り返り,今後の授業を改善するための示唆を得ることが目的であった。まず,「身についたこと」「わかったこと」「何に活用したか」については,おおむね授業目標に沿う結果であったといえるであろう。アカデミックスキル1の最終的な評価は全クラスにおいて,8割前後の学生がAないしはBであったことから,学生の自己評価と,教員による授業目標に対する到達度評価には,大きな乖離は見られなかったといえる。その要因の一つとして,複数のクラスにおいて,グループワークを積極的に導入したことが挙げられる。他者との話し

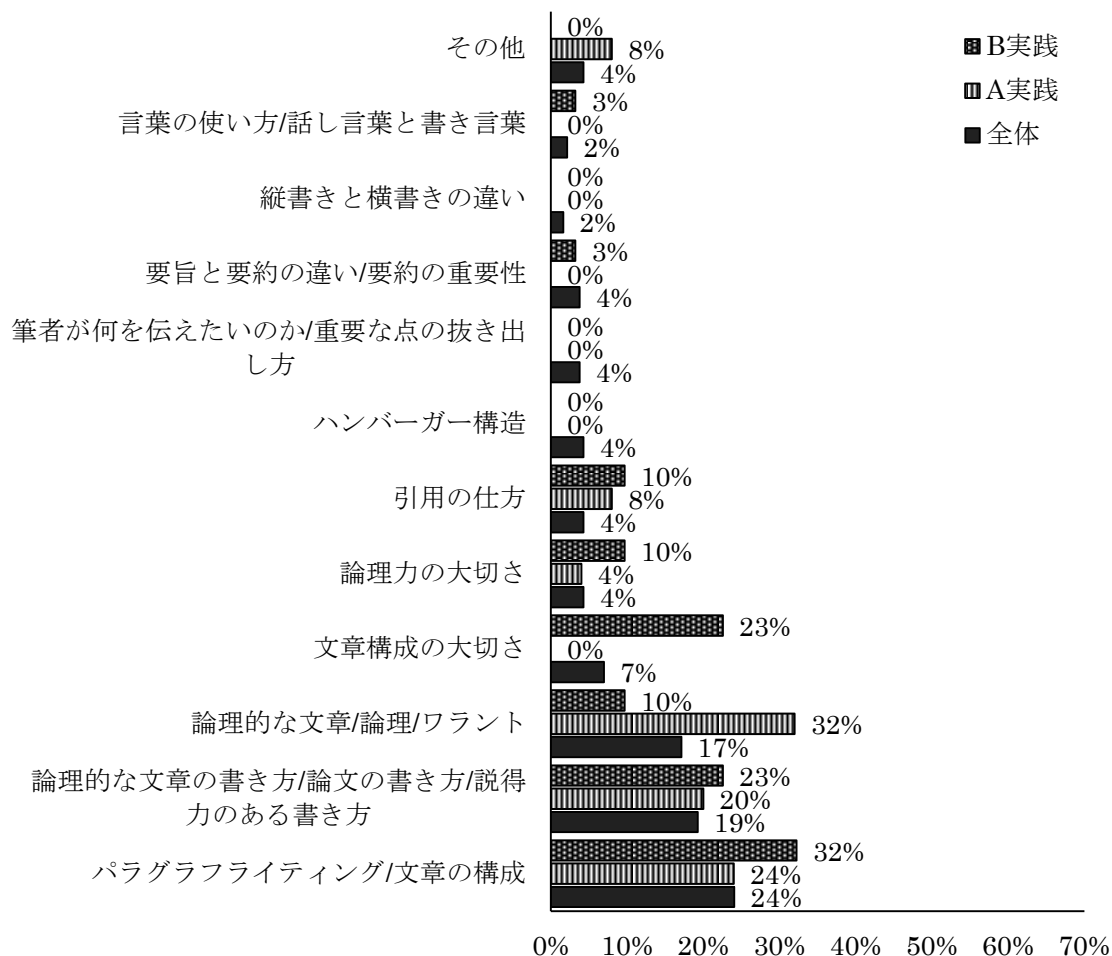


図5 「わかったこと」に関する「全体」・「A実践」・「B実践」の回答カテゴリーの出現率

合いは、自分の考えを振り返るきっかけになりやすい。そのため、他者との話し合いをコンスタントに授業に取り入れたことが、学生の適切な自己評価に結びついたと考えられる。また、「身につかなかったこと」、「わからなかったこと」については、多様な内容が挙げられた。もちろんこれらの指摘をすべて受け入れた授業を構成することは現実的には不可能ではあるが、学生一人一人の指摘に可能な限り対応することが望まれる。今後の課題としては、アカデミックスキル1での学習内容が、上位学年のレポート作成や論文作成にどのような影響を及ぼしているのかなどを検討することが必要であろう。

5. 引用文献

- 青木滋之 (2019) 長めの論証文作成に力点を置いた授業—実践報告 2 会津大学文化研究センター研究年報 第25号
- 菊地則行 (2019) 論理的思考を基礎とするパラグラフ・ライティングの段階的指導—実践報告 1 会津大学文化研究センター研究年報 第25号
- 三宮真智子 (2008) メタ認知—学習力を支える高次認知機能 北大路書房